
幸福シャワー

由羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸福シャワー

【Nコード】

N7563Q

【作者名】

由羽

【あらすじ】

そいつは、学校一の有名人で、変わり者だった。歪で異常なそいつが、俺は大嫌いなのに、何故か毎日のように話しかけてきて、言葉を交わして。そうしていくうち、俺は、知らなかったたくさんの“こころ”に触れていく。

その男は、この学校の伝説だった。

「僕はさ、かたつむりになりたいんだ」

彼の名前は翠尾。翠尾と書いてみすおと読む。本人はあまり好きではないらしいが、俺はなかなか美しい字面と発音だと思う。こいつの美しい顔にはお似合いの名だ。こいつと俺ら、本当に同じ人間かという疑問に思ってしまうほどの美すぎる顔立ち。何よりも、その白すぎる肌が、俺の記憶に最も強い印象を残した。

男の俺でさえ、こいつの顔を初めて見たときには、息を呑んだほどだ。当然、翠尾が廊下を通れば、その後ろには興奮する女子の悲鳴が響き渡る。その悲鳴を聞き駆け付けた奴が噂を聞き、見に行つて悲鳴、駆け付ける女子。そんな感じで瞬く間にその名を轟かせ、たった一晩で学校一のイケメンの名を欲しいままにした。

ところが、翠尾の伝説はそれだけでは終わらない。

「亀の次はかたつむり？ お前の興味の尽きなくていいよな。暇なんてもんに一生縁がなさそうだ」

「何言つてんのさ、暇だからこんなことを考えるんだって。ねえ、かたつむりだよ、かたつむり」

「聞きたくない」

「よくよく考えてみるとさ、なんか魅力的な気がして。ねえ、僕はさ、かたつむりになりたいんだ」

これだ。これである。翠尾の病気。彼は、奇妙な言動がめっちゃ目立つのである。みんなでバカ話をして盛り上がつてるところに、何の脈絡もなく「信号つて虫みたいだね」。空気を読む読まないの問題じゃない。頭がイカれてるんじゃないかと疑つて然るべきな台詞で、さらにそれが、彼の完璧な顔にある口から吐かれた

言葉なもんだから、空気の凍り方が、俺が言つたときの二割増だ。

誰かがフォローしようと思つても、その場の空気、手におえない。というか、彼は分かつていてやっているの、尚更手におえない。

入学当初は人気者で何にしても引つ張りだこで、周りに男女問わず誰かが居たというのに、一気に人だかりは一人減り、二人減り。あつという間に彼は、触らぬ神に祟りなしのパンダ状態となつた。でもその状況に落ち込んだ様子は見られなくて、むしろ清々して、喜んでるように見えた。翠尾がそういうやつだと知つたのは、もうだいぶ前になる。

翠尾は、人間が、大嫌いなのだ。それも、尋常じゃなく。もしかしたら、何かトラウマでもあるのかもしれない。

「雌雄同体なんだって、かたつむりって」

「しゅう……何？」

「雌雄同体。一つの個体に、オスとメスの生殖器があること。きーたことない？」

「ない」

「そ？ とにかくさ、かたつむりは、男であり女であるんだよね。ね、すごくない？」

「んー、まあ、凄い世界だな」

「それにさ、やっぱり何よりも名前だよねえ、なまえ！ かたつむりに、でんでん虫に、それにマイマイ！ イイよねえ、何て言うか、響きっていうかさ」

「んー」

「やっぱり、一番大事なのは名前だよねー」

「お前の一番大事なところは、暗いところに住むことだろ？」

そう言つと、翠尾はにつこり笑つた。いいや、やっぱり皮肉気味に、にやりと笑つたのかもしれない。ちくしょう、綺麗な顔は読み取りにくい。

エキセントリックで有名な翠尾だが、彼の話す奇天烈な語りの内容を知っている奴は少ない。だから、こいつが定期的に「なんとか

になりたい」と話すということを知っているのはきつと俺ぐらいなものだろう。

今回はかたつむり。前は亀。その前は深海魚。その前はもぐら。それらは平均して二から三週間同じ話を続けるのだが、いつだったかホラアナなんとかっていう虫の話をしたときは、珍すぎるからか美しくないからか、三日でブームは終わった。

とにかく、翠尾があげたそれらの生き物には、共通点がある。それは、隠れられる場所がある、ないし生活の基盤が暗闇の中、ということだ。

誰よりも目立つ容姿で、一番の光物のような存在なのに。光が嫌いなんて、可笑しな話もあったものだ。

「僕はさー、かたつむりになりたいんだ」

「翠尾、さ。俺の話って基本的に聞かぬーよな」

「そーかな？」

「自分勝手に、自分の話ばかりで。性格、悪くて暗くて歪んでて」「良いのは顔だけ？」

「顔も悪い」

「うえ。初めて言われた」

「そら、貴方様は綺麗なお顔をしてらっしゃいますよ。そーだけど、そーじゃなくて。なんてゆーか、表情が悪い」

「へえ？」

「いや、違うかな。違うかも。やっぱわかんね」

「なんだそれー。こっちの方がもっと分かんないよ」

あはは、と楽しそうに彼は笑った。その表情を見ると、なんだかもやしたもの胸の内に湧き上がる。舌打ちしたい気分になった。

翠尾、俺はお前が嫌いだ。

理由なんてあげられない。人が大嫌いなところも、わざわざ人とぶつからない様にして一人になるやり方も。性格も、しゃべり方

も、その白すぎる肌さえも。とにかく、何もかもが、吐き気がするくらい大嫌いだ。

「僕、かたつむりになりたいんだ」

「あそ」

「かたつむりは、雌雄同体で、男で女なんだ。完全な存在なんだ」

「だから？」

「だから、僕はかたつむりになりたい」

そのあとも、翠尾は何度も何度も繰り返した。かたつむりになりたい。まるで願うように、空を見ながら、教卓を見ながら足元を見ながら、何度も何度も呟いていた。

人間が大嫌いで、誰よりも明るいことが嫌いで、自分勝手に俺の話なんて右から左へ聞き流して自分の話ばかりで、性格悪くて暗くて。歪んで。かと思えば、子供みたいにひたむきに願いを唱え続けている。

この学校の何人が、この翠尾の歪みを正確に理解しているのだろうか。人間が嫌いでわざわざ遠ざけておきながら、毎日欠かさず学校へきて、時折ふらりと俺に話しかける。そんな翠尾のことを、いったいどれだけの人間が理解できているだろうか。理解しようとしているのだろうか。

翠尾は、次の日も、その次の日もかたつむりの話をした。

おや、と思った頃には、かたつむりのブームはすでに二ヶ月目も終わろうとしていた。

雌雄同体だ、完全な存在だ、と言い続ける翠尾の笑顔を見て、やっぱり例のトラウマは女関連か、と妙に納得して頷いた。

翠尾のかたつむりブームは三ヶ月目に入らずして終わり、今度は無機物にまで目が行くようになってしまったらしい。

「僕は、道に転がってる空き缶になりたい」

特に用事もないし、さて帰ろうと思ったものの、次のバスが来るまで時間がある。この時期にずっと外にいたら、寒くて寒くてたまらないってことで、教室で何をするでもなく時間をつぶしていたところ、何故だか帰っていなかった翠尾に捕まり、いつものように話をされた。

「別にね、これと言った理由はないんだけど。何て言うか、あの退廃的な雰囲気さ、さ」

「……………」

「あ、今日ね、バスから捨てられた空き缶見たんだよ。だからそう思ったんだけど、塗料が剥けて、スチールだから赤茶に錆びついてさ、車に轢かれたのか、ぺったんこになってんの」

「……………」

「それで、その雰囲気が、いいなあって」

「……………」

「…………… ねえ、どうしたの？ 怒ってるの？」

いつもの俺は、興味無いながらも気の抜けた相槌を打っているのに、今日に限って無言なので不審に思ったようだ。怒ってるのという声は心底不思議そうで、俺が無言な理由が全然分からないと語っている。俺が本気で怒っているとは、思っていないようだ。

ちがう、と俺は小さな声で囁いた。掠れていて、声になっていない。

かぜひいて、のどがいたいから、しゃべりたくない、だけ。おこつてないから、きにするな。

「ほんとにすごい声だね。熱とかはないの？」

ない。いいから、きにするな。あきかんのはなし、べつに、つづけていいから。

「うん。分かった」

翠尾はそう言ったものの、薄暗く灰色に曇った空を物憂げに見つめたまま、何もしゃべらない。さっきまで空き缶の話をしていた時はキラキラと目が輝いていたのに、まるで別人のようだ。

「……うん、わかった!」

なにが?

「帰ろう!」

結局、こいつとはまともな会話ができないということだけがわかって、俺も帰る支度をした。早く帰る分には困ることは何もない。

バス時刻の方も、もうすぐ来る丁度良い時間だ。

なんとなく二人で並んで歩いて、ちらちらと女性が翠尾を見ているのが分かりながら、バスの中でもなんとなく隣に立っていた。俺も翠尾にならってその女子大生らしき人を完璧に無視をする。結局、駅についてからも、俺と翠尾の間に会話はなかった。

すると、ふいに翠尾がここで待っててと言い残して、ふらりとどこかへ消えていった。どうしようもなく、ぼんやりとマフラーをいじりながらその場所でぼつんと待っていたのだけど、十分とせず、翠尾は戻ってきた。

「はい、これ」

なんだ?

「のど飴と、マスク。辛そうだったから。あと、マスクぐらいした方がいいよ」

そう言っ、小さなコンビニの袋を差し出した。一応手を出して受け取りながら、しわがれた声を絞り出す。

なんでとつぜん、しんせつになっただよ?

嫌味でもなく、ただ普通に疑問に思っ、口にした。翠尾は、他人のことなんてどうでもいいと思っ、いるのに。実際、俺のことなんて、話を聞いてくれる人、その程度の認識なんだろう。

すると、俺の予想していた反応とは違い、翠尾はきょんとして、当然のことを言っているような口調で答えた。

「なんでって。大好きな友達が風邪を引いて苦しんでたら、心配するのは当然でしょ」

面食らっている俺の反応が予想道理だったのかどうなのか、よく分からないけれども、じゃあね、と短く挨拶をして翠尾はホームへ歩いて行った。俺もああ、とよく分からない返事はしたけれど、いつも通りじゃなかったのは確かだろう。

大好きな友達？ いったい誰が。いや俺か。

だいが俺は混乱している。あの翠尾が、大好きと言った。この俺のことを。この俺のことを？ 翠尾が？ 好きと言った？

俺の中の翠尾が、少し分からなくなった。だって、あいつが人間嫌いなのは、俺の中では大前提なのだ。どうやっても、あいつはきつと死ぬまで人間という種を愛することはできなくて、歪で、苦しくて、普通とはズレたところにいる。俺にとっては翠尾はそういう位置にいて、そういう奴だと思って今まで接してきたのに。それなのに、大好きな友達ときた。いや、分からない。あいつのことが分からない。

適当なことを言っただけなのか？ 本当は嫌いだけれど、何かの気まぐれで、誰かに好きと言ってみたかった、とか。そうなんだろうか。ありえなくはないと思うけれど。どうなんだろうか。分からない。翠尾が、全然分からない。

結局家に帰ってからその翠尾の発言に悩まされて、分からんと叫びだしたくなっただけで、声が出ないことを思い出して断念。次第に、翠尾にここまで悩まされるのが馬鹿らしくなって、あいつ

はそんな深いことなど何も考えてなかったのだ、ということでは自己完結した。

その日の深夜、少し遅くなったが、すっきりした気持ちで眠りに
が、次の朝、熱を出した。知恵熱なのか風邪なのか、とりあえず
翠尾の所為だ、と呪言を呟いた。

ここにきて突然だが、少し藤ノ森の話をしたい。

藤ノ森は俺たちのクラスメイトで、出席番号四十番、大人しく控え目、静かで、読書家の眼鏡っ子。俺に限らず、男子全般と話もしたことがなさそうな女子だ。

彼女は、このクラスで少しばかり特殊な立場に居て、所謂浮いている生徒というレッテルを貼られている。さすがに高校生になつてまであからさまないじめをしている生徒はいないが、無視やちつとも面白くないからかいが日常茶飯事だ。

それも勿論良いことでは無いのだけど、やっぱり一番の問題は当人にある。無視をされることを分かつてるからか、よっぽどの用事でもない限り、誰かに話しかけたりは絶対にしない。いつでも何かに怒っているような無表情で、本を読んでいるか、そうでなければ机を睨んでいるか。机の周りで騒ぐクラスメイトにからかわれてもじつと唇を一文字に結んで、うつむいて、耐えるように小さな肩を怒らせているだけだった。

いじめられる人間独特の雰囲気、とでも言おうか。そういった、負の感情が取り巻く空気を、彼女はこのクラスの誰よりも濃く身にもたっているのだ。

なんとまあ、不器用な子なのだろうと思う。自分を誤魔化して、上っ面だけでも笑って馬鹿やってれば、少なくとも今よりは楽だろうに。それができないのかしないのか。それともしたくないのか。何かと悪い意味で目立つ子なので、目に止まることは多いのだが、まあ、俺には何の関係も無いことで。藤ノ森のことが嫌いなわけはないが、別に、あいつのために何かしたいだとか、そんな殊勝なことは思いつきもせず。

だから、俺にとっては彼女はもうでもいい同級生だったのだけけれど、突然語りだしたのには理由がある。

ある日のことだ。

「翠尾と仲良いんでしょう?」

俺と藤ノ森しかいない放課後の教室だった。俺は何をするでもなく時計を睨みつけていて、彼女は本を読んでいた。

俺は窓側の席に、藤ノ森は丁度教室の真ん中にある自分の席に、二人の間に距離があるまま顔を合わせ、話を続けた。

「いや、別に。確かに話すことは他の奴らよりも多いとは思っけど、周りが思うほど仲良くはないよ」

「そうなの。確かに、あなたと翠尾って、仲良くなるようなタイプに見えないものね」

「そう見えるか?」

「ええ」

まあ、確かにその通りかもしれない。というか、翠尾と仲良くするタイプって想像つかない。あいつは、どちらかと言えば……仲の良い友達がいないタイプ、だ。

「翠尾のこと、全然分からなそうな性格してそうだもの」

「まあな。翠尾の性格が分かるやつの方が珍しい気もするし」

「そうかしら。私には、分かるような気がするけど」

藤ノ森は、薄めの文庫本を手にして、あるページを開いていた。

誰の何て言う本なのかは、皆目見当つかない。

「翠尾のことが?」

「ええ。彼はきつと、寂しいのよ」

ふむ。寂しい。分かるような分からないような。

「だから人間でいることが嫌なの。寂しくて虚しいから、他の何かになりたいのよ」

うーん。そうなのか?

「きつと人間を憎んでる。なんて愚かなんだろうと、心のどこかで嘲笑っているんでしょうね」

いや、それは違うだろうな。

俺は今まで翠尾の相手をしてきて、彼の人間全体に対する嫌悪感を感じたことがあっても、憎悪という感情を感じたことは一度もない。清々しいまでの、嫌悪のみの感情。

翠尾の心の中は、渦巻くような憎悪はない。凍てついてひび割れているような、冷たい感情のみなのだ。

翠尾は複雑な人間のように、その実、とてもシンプルだ。

「いや。違うよ、きつと」

「何であなたに分かるのよ」

「翠尾には、少なくとも憎んでる人はいない。俺は、今までそんな話を聞いたことが無いし、あいつの何かに対する憎悪の感情を感じたことは一度もないんだ。まあ、翠尾と直接話したことないんなら、そう思っても無理無いとは思っけどさ」

「……………親しいから、あの人のことが分かるって？」

「だから、親しくないって。それから、翠尾のことは全然分からない。藤ノ森だつて言つてただろ？」

「じゃあ、私はもっと分かってないって言ってるのね。翠尾のことが大嫌いなあなたよりも」

憎々しげに彼女は呟いた。眼鏡のレンズごしの黒々とした瞳にも、はつきりとした憎いという感情が読み取れる。

「分からないよ。世界を憎んでる藤ノ森には。憎まれないと思ってる翠尾の気持ちは、分からない」

彼女と翠尾は、違う。

「藤ノ森さ、仲間を探すなら、もっと別のやつを探したほうが良いって」

「…………何よ、仲間だなんて、思っていないわよ…………。分かってたわよ、最初から…………！ 彼が、…………彼は！ 私たちとまったく違うところに立ってて、全然違う方向を見て…………！ そういうところに、私

は、懂れたんだから！」

「うん」

「だからっ……！」

ぼろ、と藤ノ森の目から涙がこぼれた。すると、彼女は本意そうに顔をしかめ、ごしごしと乱暴にブレザーの袖で涙をぬぐった。あまりに力を入れすぎたため、目元が赤くなってしまうていたけれど。

そして、まるで親の敵でも見るように俺を睨みつけた後、荷物を持って教室から出て行った。

藤ノ森も、普通で平凡なようできて、それでいてひどく歪んでいて。なんて複雑な人なんだ。

彼女の痛みなんて、俺はどれだけ考えてみてもちつとも分からない。翠尾に至っては、例え藤ノ森と話しても、考えようとしてもしいはずだ。

藤ノ森は、翠尾の何かに惹かれ、懂れていた。

恐らくは俺が嫌っている、彼の“何か”に。

それが、翠尾にとって良い“何か”なのか、そうじゃないのか、それだけなら、俺は知ってみてもいいなあ、と思った。

今日は、珍しいもんを見た。聞いて驚け。

翠尾が、教室で女子と話をしていた。

「帰ろうよ」

「……いやです」

こんな会話が聞こえてきたときは、“おいおいおいここ学校だぜ”と心の中で突っ込んで呆れていたのだけど、声の主を知って、さらに驚く。

帰ろうと言っていたのが、翠尾。いやだと言っていたのが、俺の幼馴染だ。

「もういいです、放っておいて……！！」

なに、修羅場？　なんでいきなりそんな状況にぶつとんでんだ、幼馴染よ。

幼馴染と言っても、そんなに今でも話をしているわけではない。母親同士が仲良いので今でも交流はあるのだが、当人同士は性別も違ったということもあり、少しずつ疎遠になっていった。

その彼女の名は唯子。大人しく女らしい子で、目立つ容姿でもなく、それなりに仲の良い女子と毎日楽しくやっているようだ。もっとも、唯子の名前なんて俺らの間じゃ出ないから、遠目で見て思ったことだけだ。

「はな……、放して！　やめて、もう死ぬ！」

「だからさ、僕の話も聞きなよ。本当にここから飛び降りるつもりなの？」

おいおい。こりゃちょっと穏やかじゃなくね？　唯子が自殺だった？　それに、説得する役目が翠尾なんて、絶対無理だ。むしろ背中を押してやりそうだ。

不安になって、ドアの後ろから顔を出す。二人とも俺に気づかず、睨みあった視線を外さなかった。その異常な雰囲気、さらに不安

が募る。このままにしておいてはいけないと思った。

「ちょ、落ち着けて、唯子も、翠尾も」

二人はぱつと、はじけるように顔を俺に向けた。翠尾は形の良い黒目を大きく見開きながら。唯子は、真っ赤になった目に、涙と恐怖を湛えながら。

「……あれ、この子と知り合いなの？」

翠尾は驚いた顔のまま俺に向かって言った。

「幼馴染だよ」

「え？」

珍しく口をあけて間抜けそうな顔をしている、翠尾。ぽかん、という効果音がつきそうだ。

その隣で、ここからでも分かるほど体を強張らせ震えている唯子。その右手は、翠尾に腕を掴まれていた。そして反対の手は、拳を作っていたのだが、強く握りしめすぎて、真っ白になってしまっている。

「何したんだよ、二人とも。なんかあったのか？」

唯子は唇を噛み締める。その様子を冷たい目で見ていた翠尾は、ずっと目線を外して、いつも通りの笑顔で、簡単に説明をした。

「この子がね、ここから飛び降り自殺するって言つから、やめなよって言つてたんだ」

びくり、と唯子は体を跳ねさせた。唇をさらに強く噛み、ぼろぼろと涙を落とす。

すると突然、翠尾の腕を振りほどき、あつと言つ間に唯子はこの場から逃げ出した。俺も翠尾も呆氣にとられていたのだけど、しばらくして、翠尾から帰ろうかと言われた。そうだなと言って、俺は帰宅の準備を始めた。

俺も翠尾も、いつも無言が多いのだけど、今日の沈黙は俺にとって、少し痛かった。

「家に帰ったら、唯子の様子、おばさんに聞いておくから」
教室を出てすぐ、切り出した。

「うん。直接は聞かない方が良さと思うよ」

「は？　なんでだ？」

「あの子、君のことが好きみたいだから」

「は？」

俺のことが？

「冗談か？」

「いくら僕でも、こんな悪趣味な冗談言わないよ。聞いてなかったの？」

「何をだ？」

「彼女の、飛び降りしようとした理由」

「聞いてないけど……」

予想はつく。今、唯子の家は両親の仲が最悪だと聞いている。毎日のように喧嘩をしていて、たまにしていなくてもぴりぴりしてお互い無言で、もう家庭は冷え切っているらしい、と母は言っていた。

離婚も近いかもねえ、と付け足すように言った母は、長年の親友の身を案じているように見えた。

しかし、翠尾の口から話されたことは、まったく違うことだった。「なんかね、幼馴染のことが好きなんだって。でも、最近全然話さなくて、相手のことが心配なんだけど、何もできないのが悔しいんだって」

「その幼馴染って俺のことか？」

「それは君の方が詳しいんじゃないの」

十中八九、俺だな。

「だとしたら、なんであいつに心配されてんだ、俺？」

「ふわふわしてるんだって」

「はあ？」

「個人としての……なんて言ってたかなあ。特徴？　実体？　えーと……その人の本質、らしきものが、その人には無いんだって。他人に合わせるのばかりがうまくて、自分を持ってない。だからそ

の人の中身は、いつもふわふわしてて、あの子から見ると危なっかしく思えるんだって」

「なんだ、それ」

「ね。なんだろうね」

何でもないことなのだと、翠尾は言ってくれたようだった。いつものような口調で、いつものような笑顔で軽く、答えた。

しかし、俺にはそれがわざとらしく聞こえてしょうがない。実は、翠尾も俺のことをそう思っているんじゃないだろうか？ だから、俺に気にするなど言っているのではないだろうか――。

バスを待ったため立ち止まると、俺の隣には翠尾が並ぶ。

白すぎる肌。綺麗な顔だとつくづく思う。女顔のような気もするが、男らしさもある。老若男女問わず気に入る容姿だと誰かが言っていたが、それなら、俺は限りなく少ない部類に入るのだろうか。俺は翠尾が嫌いなのだ。顔も含め、性格も何もかも、生理的に、とにかくだめなのだ。どうしてかなんて知らない。分からない。

翠尾は、そんな俺を、哀れに思っているのだろうか。

だから俺に、構うのだろうか。

ああだめだ、疑心暗鬼になりすぎている。深く、ひとつ、息を吐く。

家に帰った後、母親に、唯子の母から連絡が無いことを確認し、携帯電話を手に分の部屋へ直行する。

唯子が出ませんように、と祈りながら彼女の家のアドレスを探し、発信。

すぐに彼女の母親が出て、特に変わった様子はなかった、と答えた。

今度は浅く、安堵の溜息を吐き、通話を終えた。

それから三日後、唯子は自殺を試みた。

現場は自分の家。両親が日課の言い合いをしていたところ、ドンという不審な音を聞いたため庭を見れば、血を流している自分の娘が居た。急いで病院へ運んだところ、どうやら少し頭を打ったみたいなので、念のため入院をすることに。が、怪我自体は、そう酷いものはなかったようだ。

目が覚めてからも、唯子は黙秘を続ける。自宅二階の自分の私室から飛び降りた理由については、ついぞ語られることが無かったという。

唯子が飛び降りをしたと聞いた次の日、普通に学校へ行き、放課後になってから、翠尾と一緒に病院へ行くかと尋ねてみた。

「なんで僕が？」

「いや、この間のこともあるし。気になってたらな、と思って。唯子もお前のこと、気にしてたらしいし」

「あの子が？」

「そう。自分のことは何も言わないのに、お前のことばっか話すんだって」

「ふーん」

もう一度、来るかと尋ねれば、じゃあ行くと返ってきた。翠尾と同じバスに乗ることになんだかもう慣れてしまったことに気づく。

最初は、周りの視線が痛くて居心地が悪かったのだが。

駅まで行き、いつもとは違うバスに乗る。それに翠尾も付いてきた。吊革に捕まりしばらく揺られれば、唯子が入院している総合病院前の停留所が見えてくる。やっぱり、俺たちはずっと無言だった。

院内に入ったところで、俺はふと、思い出して話しかけてみた。

「そつえば、お前が自殺を止めるなんて意外だったな」

「んー？」

「お前、自殺とか止めたりしないかと思ってた。むしろ、後押しし
そうだって、思ってたんだよな」

「ああ、唯子ちゃんのこと？ あれはね、飛び降りなんかやめなよ
って言ったただだよ」

「……うん？」

「だって、あそこ三階でしょ。よっぽどきれいにいかなきゃ、死ぬ
こともできないよ。それに、万が一死ねたとしても、後々先生たち
が面倒でしょ。だから、ここからはやめときなよって言ったんだ」

「それを、唯子には？」

「言ったよ、もちろん。でも、駄々こねててさ。なんだか衝動的な
ものだったらしくて、結果はどうあれ、とにかく飛び降りたかった
だけみたい。今回のも、たぶんそうでしょ。二階から飛び降りでし
よ？」

「そう聞いている」

「真剣に死ぬのを考えてたら、ありえない高さでしょ」

まあ、確かに。飛び降りにさして詳しくない俺でも、そんな高さ
じゃ死ねないだろうことぐらい、想像はつく。

「やっぱり、もうちょつとあいつに気を配ったときゃ良かったな」

「気を付けて目を付けてたって、結果は変わらなかったと思うけど
ね」

確かに、衝動的ならそういう意味ないか。

そうこうするうちに唯子の病室にたどり着く。ただの骨折と聞い
ていたのだけど、そこは何故か一人部屋だった。高給取りの父親と、
世間体が気になる母親が、よく話し合った結果ということなのだろ
うか。否、恐らく、自殺未遂を試みた娘がいるという事実を、どう
隠すかという相談を怒鳴りあいながらした結果なのだろう。

ぴつたりと閉ざされているドアをノックし、返事を待たずにそろ
そろと開ける。唯子はぼんやりとこちらを見つめていて、俺と翠尾
だと気が付いたとたん、ぱつと表情を変え、上体を起こした。
「な、何したのっ?!」

「何って……お見舞い」

「み、翠尾君も……？」

「うん。君が、僕のことよく話してるって聞いて」

「あ……。う、ん。謝りたくて……」

「あやまる？」

「うん。ごめんね。その、この間、学校で。いろいろ言ってくれたのに、結局飛び降りちゃって」

「ああ。まあ、いいんじゃない。本気で死にたかったわけじゃないみたいだし、家なら迷惑かかるのは、両親だけだしね」

「そうだね」

そんなことを言う奴があるか。俺は一応翠尾に非難の眼差しを向けたのだが、気づく気配はない。もしくは、気づいているが無視している。

その後、翠尾と唯子は二言三言話して、翠尾はさつさと、じゃあ僕あそこでジュース飲んでるから、と言って出て行った。これは唯子と二人で話をしろということなのだろう。そんな気を回すなんてなんだか翠尾らしくない気がしたが。

「……あのね」

「うん？」

「あのね、私ね、本当に死のうと思ったわけじゃないの」

「ああ、そりゃな。二階だもんな」

「うん。最近、何て言うかな、ちよっと、参ってて。家のこともだけど、あ、うちのこと知ってる？」

「ちよっとな」

「うん。それもあるんだけど、一番最初に思い浮かぶのは、それじゃないの」

「この間翠尾が話してた、俺のことが好きってやつか？」

「そ……そう。私ね、不安なの」

「不安？」

唯子は、意を決したように、口を一文字に引き締める。そして、

深く息を吸って、早口で話し始めた。

「……………あのね、いつも、ふわふわしてる気がするの。自分っていう土台がしっかりしてないっていうか、自我がないっていうか……………。いつでも他人に合わせるのかな。違う気もするけど。例えばね、私が相手だったら、どんなくだらないことにも笑ったり、受け身の良い人になるの。でも、クラスの人とだと、自分から馬鹿やって笑いを作る人になる。それで、翠尾君が相手だと急に冷たくなってぶっきらぼうになるの。それって、たぶん、その場の雰囲気とか、相手の欲しいもの優先の付き合い方のような気がするの。自分の話したいこととかも絶対言わないし、感情なんてそっちのけでだからね、自分のことが分かんなくなってるんじゃないかって……………。だから、翠尾くんとはよく一緒に居るのかなって、思ったの。翠尾君って、不思議な力があるでしょう？自分がどんな奴でも、気にならなくなるような。翠尾君の話を聞いてると、自分が自分じゃなくなるような気がするんだよね。」

ここまで聞いて、つい苦笑いをしてしまった。

話が、長すぎる。怪我したって聞いて、それなりに心配もしてたのだが。なんだ、全然元気じゃないか。

その俺の苦笑いをどうとったのか、唯子は変わらず真剣そうな表情で、だからね、と言った。

「誰が悪いわけでもないんだけどね。私、翠尾君とは一緒にいない方が良いと思うの。」

唯子の目を見る。

「……………ねえ。私じゃ、翠尾君の代わりには、なれない？」

今にも泣きだしそうな表情に見えた。

それで分かる。ああ、本当に、こいつは俺を心配していたんだ。長々とされた話は、正直、半分もわからなかったけれど、恐らく

的を得ている。

俺も、俺が分からないのだろう。自分のしたいことをしてるだけだっけ言うのは簡単だが、考えてみれば流されているだけのようないきがしてしまう。だって、俺のしたいことは何だと問われても、俺は言葉に詰まってしまうから。

最近じゃ大して話もしていない幼馴染のことを、唯子はこちらまで理解しているのだ。俺は今の今まで、唯子が何を思っているのか、知りたいとも思わなかったのに。

けどな唯子、お前は、ひとつだけ間違ってるよ。

翠尾はそういう奴じゃない。

あいつは、

「唯子」

また、苦笑い。唯子はさらに不安げな顔をして、眉間にしわを寄せる。彼女の瞳には、怯えとともに、極度の緊張の色も浮かんでいた。

「唯子の肌。白いとは思ってたけど、翠尾の方がずっと白いんだな」

少しの間きよんとして、俺が何を言ったのか、それを理解した途端、わっと声をあげて号泣しだした。

当然だ。俺は、何も聞いてないふりをした。彼女の精一杯の覚悟と心遣いを、迷惑だと目の前でごみ箱に捨てたのだ。

翠尾がやってきて、そのうち看護師もやってきて、誰が何を言っても、唯子はただ泣き続けた。結局、その日は看護師に叩き出されるまで、何も言わず泣く唯子を見ていた。

なあ、唯子、あいつはな。
翠尾はな、知ってるんだ。

あいつは、まるで当然の事のように、俺の本質のすべてを知っているんだよ。

その日は、如月のとある日曜日。休みだというのに、珍しく翠尾に呼ばれた。駅前に集合をかけられ、断る理由もなかったのとおりあえず了承。待ち合わせ時刻の五分前に到着すれば、そこにはすでに翠尾は居て、挨拶も適当に、さっさと地下鉄へ向かった。

そこから、約一時間弱。

「ごめんね、用事とかあった？」

「いや、別に。暇だったけど」

「そっか。良かった」

そう言って、翠尾は俺の知らない土地を歩き始めた。バスと地下鉄を乗り継いで、駅からここまで、いったい何キロあったのだろうか。俺が聞いたことも無いようなバス停で降り、その目の前が目的地だった。

小さいけれど、綺麗な病院。日当たりがよく、周りに植えられている木々は、今は葉が落ちてしまっているが、春になればさぞ立派な木になるだろうことを思わずにはいられない。

「翠尾、ここは？」

「病院だよ」

「だから何のだよ」

「精神科とか。心療科とか。詳しいことはよく分かんないけど、入院もできるメンタル面の病院だよ」

「で、そんなところに何の用事が？」

「うん、もしかしたら君の方が用事があるんじゃないかなって思ってた」

「……は？」

それはどういう意味だ、と少しの憤りが湧く。

「翠尾。お前には、俺がここの診察が必要な部類の人間に見えるのか？」

「うっん、僕じゃなくて。唯子ちゃんには、そう見えてたみたいだけど」

唯子だって？　なんで翠尾の口から、あいつの名前が出てくるんだ。

「どういいうきさつがあつてだ？」

「そう大がかりなのは無いよ。あの日の後さ、やつぱりあの子のことが気になって、次の日もお見舞いに行ってみたんだ」

そこで、俺は一度、目を見開く。

「で、したら、泣きながら頼みごとをされちゃってさ。掴みかかりそうな勢いで、君を救ってくれて。自分じゃどうにもできないから、僕になら、って」

それで、俺をここに連れてきた。そう理解した瞬間、二度目の驚きは不愉快に変わり、開いていた目を細め、眉間にも皺を寄せる。

「嘘つけ」

「なんで嘘だつて思うの？」

「翠尾らしくないだろ、そんなの。自分から唯子の見舞いに行ったり、その唯子の懇願に負けるような男じゃないはずだよ、お前は」

「それを言われたら反論できないなあ……。僕もそう思う」

「だったら、なんで」

「うーん……。自分でも意識したことなかったんだけど……。なんか僕、飛び降りした女の子に弱いみたいだ」

翠尾がふざけているのかどうか、探るために相手の目を見る。よほど俺の顔が怖くなっていたのだろうか、翠尾は困り果てた様子で眉尻を下げていた。こいつがこんな表情するなんて、よっぽどなそう気づいて、なんだか自分を笑いたくなった。こんな必死になるなんて、まったく。もっと大人の態度がとれないのか、俺は？

「……別に、君を無理やり診察させたいわけじゃないよ？」

「……………そうか」

こいつがそう言うのだったら、きっとそうなのだろう。素直にそう思ったら、俺の中を渦巻いていた感情も、すっと消えていった。

多分、翠尾が感じていた俺の害意も、消えたことと思う。
すると、いつも通りの口調が目の前から聞こえてくる。

「診察する気が無いならさ、僕の用事を先に済ませて良い？」

「用事？」

「うん。ていうか、今日はそのつもりで来たんだ」

翠尾の話では、今日は俺の診察とかは考えておらず、ただ唯子が
そう思ってたことを報告しようと思っただけらしい。ここへわざわざ
来た理由は、翠尾の用事がメインだったそう。

それを聞いて、さらに拍子抜けした。だったら、さっきの俺が必
死になって翠尾に噛みつく理由も最初から無かったじゃないか。

そんなことを思ってるなんて知らないまま、翠尾は先へ行つてし
まう。仕方なく俺もその後ろを追って、入院患者が居るらしい病棟
へ足を踏み入れる。

「ここって、入って良いのか？」

「大丈夫だよ。話、つけてあるんだ」

「は？」

「この院長と僕らの父親が、知り合いなんだ。いろいろと借りも
あるみたいで、優遇してくれてるみたい。ま、秘密なんだけどね」

「僕“ら”……？」

「うん。ここだよ」

そう言っただけで着いたのは、日当たりのいい一番端の病室だっ
た。病室、という呼び名よりは、一人部屋、と言った方が良いかも
しれない。それなりに広く、色彩も豊かだ。俺のイメージする病室
とは程遠く、唯子の居た病室の雰囲気とも、大分違った。

寄せ書きや千羽以上ある吊るされた鶴や、統一性の無いぬいぐる
みや写真。それらがいたるところにあって、そしてそれをすべて見
渡せる位置にベッドが置いてある。

彼女は、当然のようにそのベッドの上に居て上半身を起こしてい
た。けれど、何を見るでもなく、焦点の合っていない目でうつむい
ている。

「あの人は、志麻。僕のお姉ちゃんだよ」

翠尾の、姉――。

そう考えると、なんだか少し緊張した。なんと言ったら良いのか、翠尾にも家族がいるのだと、改めて思ってしまったと言うか。そして、彼の姉が、どうみても心の病気だということに驚いたと言うか……。

「あと、僕の、恋人でもある」

事も無げにさらりと言った翠尾は、いつも通りの笑顔で微笑む。

俺が驚愕の表情を浮かべていることに、気が付いているのかいないのか。

ベッドの上の志麻さんは、ゆっくりと、そしてぼんやりと、こちらを振り返っているところだった。

翠尾家はもともとそれなりの名家で、生まれた時から厳しい教育を受けていたと言う。

今では自由気ままな翠尾も、その姉である志麻さんもだ。お家柄に加えて、父親が生真面目でその上厳しかったことが一番の理由らしい。

そしてその父親は、教育、躾は勿論、交友関係にもうるさかった。遊び友達も、すべて父親に決められる。どれだけ気の良い友達でも、父親から“相応しくない”との判定が下されれば、教室で談笑することさえ制限されてしまう。異性の友達などもっての外だ。社交辞令以外の会話をしたのが父親にバレれば、大目玉をくらうことになる。

「そんなのさ、有り得ないでしょ。でも、どうしたことが、僕らは従ってたわけだ。お互いを支えにして、さ。支えだったから頑張れたのか、それとも辛かったから支えにしたのか、それは分かんないけどね」

自分の時間などなく、いつでも叱られ続けている日々。同級生と仲良くすることもままならない。それは、翠尾にとって、耐えられないものではなかったが、頑張れたものでもなかったと言う。

いつしか彼は父親の言いつけを守らなくなることが多くなり、最初こそ父は激怒していたものの、次第に翠尾を見限るようになった。気楽になったのは嬉しかったけれど、今度は志麻の負担が増えていったんだと、翠尾は悲しそうに笑顔で呟いた。

日に日に衰弱していく志麻さん。それへの罪悪感と心配を胸に、翠尾は自分の姉をとても気遣った。それが、志麻さんにとっては嬉しかったのだろう。もともと奇妙な連帯感のあった姉弟だ。それ以上の関係になるのに、時間はかからなかった。

「僕らに倫理感や道德意識が無かったわけじゃ無いけど、でも、そ

れ以上に好きだった。親よりも、友達よりも、僕らを気遣ってくれるだけの人よりも。誰よりも、姉のことを、愛してたんだ」

その関係はしばらく続いたけれど、志麻さんが高校を卒業した直後に、事件は起きる。

彼らの父親は、厳しいだけで直接自分の子供に興味を持っていたわけではなかったそうだが、どうしてなのか、彼らの関係を知ってしまった。その直接の原因は、翠尾にも志麻さんにも覚えがなく、そして尋ねることもできず、結局分からず終いだっただけらしい。

「さすがのあの人もね、何て言ったらいいのか分からなかったみたい。夜に行き成り僕らを呼び出してさ、言いくそうにしてたんだ。しょうがないから、僕が助け船を出してあげただけだ。」

僕らの関係のことですかって言ったら、たつぷり間をあけて、男女の関係とは本当なのかって。志麻は真っ青になって固まってたから、僕がそうですって答えてあげたんだ。そしたら、あつちも蒼白になって、そうかって一言。

それだけ言われて、しばらくした後、今日は一人で部屋に居なさいつて言われたんだけど、僕と志麻はずっと話してた。今思えば、あの時の志麻の怯え様は、ちょっと怖かったなあ」

父親は塞ぎ込んでしまい、志麻さんも部屋から出たがらなくなつたと、翠尾は飄々としたまま語った。その姿に、俺は止めていた息を少し吐き出す。

想像はつく。実の父親に真実がバレてしまったことさえ、なんでもないことだと、志麻さんに言っている姿が。きっと、自分の過ちに怯えている彼女に、大丈夫だと心の底から思いきりと言っている翠尾が、三年前にはすでに存在していたのだ。

一家の大黒柱であり厳格な父親であつた人が塞ぎ込み、長女が部屋から出ようとせず食事も摂らない。長男だけが何も気にせずいつも通りの生活を送っている。その時の奇妙な翠尾家の光景は、一部でだいぶ大騒ぎになっていたらしいと、まるで他人ごとのように言っていた。

そして、志麻さんが部屋を出なくなつて、二日三日四日と時間が過ぎ、五日目の朝。

そこに彼女の姿は無かつたと言う。

結局、彼女は見つかった。

夜になつてようやく来た、警察からの電話で。

名も知らないマンションから飛び降りたらしい。けれど、ギリギリのところまで生き延びてしまい、真っ白な顔をした志麻さんは、大学病院のベッドに横たわつていたと、淡々と翠尾は説明する。

その時の父親の行動や、看護師と医師の様子、病室の情景、志麻さんの容体等、事細かに翠尾は話したが、そのどれにも彼自身の気持ちは入っていないかつた。恐らく、今でも彼の中には、言葉にできない感情が渦巻いているのだ。

「その後は君も見たでしょ？ 頭はそれほど強く打つてないらしいけど、反応は全然返つてこないし、話しかけてもこない。どうやら心の問題らしいつてことで、今の病院に移つたんだ」

「親父さんは？」

「いろいろ反省してるらしくて。僕のところには何も言つてこないし、志麻のことに関しては直接会いに行つたりとかはしてないみたい。病院に話を通したりとかは、頑張つてるらしいけど」

「そうか」

バスや地下鉄内での、長い長い駅までの時間を、翠尾は上のような話でつぶした。俺は気の利いた相槌さえ打てず、ただ頷いているだけだつたのだが、それでも翠尾は話し続けた。

「今の話には、母親の名前が出なかつたけど、どうしてるんだ？」

「さあ？ 僕たちの母親は、僕を生んですぐに家を出たらしいから。今じゃ、何をしてるのかまったく分からないんだ」

「ああ、悪い」

「うっん。別に良いよ。母親なんて、とくに思い入れがあるわけでもないし」

微妙な沈黙が流れる。母も父も健在で、唯子の家のように事情があるわけでもなく、どちらかと言えば母親に味方することの多い俺にとつて、何て返したら良いのか分からない話題だったのだ。

「まさか、毎日お見舞いに行くわけにもいかないしね。あの病院に行くのは、月に一度つて決められてるんだ」

「決められてる？ 誰に？」

「父親……ていうか、院長？ 僕は志麻といろいろあったから、病状の悪化を警戒して、できるだけ面会は減らして欲しいって言われたんだ。で、相談した結果、月一ってことで収まった」

「そうなのか？ それじゃあ、俺が今日ついてきたのは、邪魔しちゃったんじゃない？」

「うっん、全然だよ。誰が来ても志麻の反応は変わらないし。僕は、むしろ来月も来てほしいくらいし」

「は？ なんでだ？」

「きつと志麻も、君に来てほしいって思ってるからだよ。だから、君さえよければ、来月の第一日曜は空けてほしいんだ」

志麻さんが来てほしいと思ってる？ そんな馬鹿な。だって俺は、彼女の存在すら、今さっき知ったばかりなのだ。知り合いなわけがない。

仮に、翠尾が毎月俺のことを彼女に吹き込んでいたとしても、あの様子の彼女が俺に会いたいと言うはずがない。そもそも、翠尾の話すら、聞いているのかどうなのか、怪しいものなのだ。

そんな俺が、この濃密すぎる二人の間に入っていいものか。悩んだが、翠尾の笑顔を見ていると、不思議と言葉が零れ落ちる。

「分かった」

すると、翠尾は満足そうに笑みを深くして、ありがとうと言った。

なんだか俺の方がお礼を言いたいような心地になったが、それも不自然だと思ったので、呑み込む。

空気を讀んだかのように地下鉄は目的の駅で止まり、俺と翠尾は一緒に立ち上がった。その仕草にさえ、ずっと翠尾を見ていた二十代後半の女性はほう、と溜め息を吐く。その気持ちは分からないでもない。

でも、俺はどうしても彼女に良い感情が持てなかった。その女性よりも綺麗な肌をしている翠尾は、あまりにも白すぎて、いっそ不健康だ。

「なあ、翠尾、一つ聞いてもいいか？」

「ん？ なにー？」

「なんで、俺にわざわざそんな話をしたんだ？」

唯子の懇願に負けたからかと思っただ、なんだか今回のことは、それとは無関係な気がしたのだ。具体的な説明や確証などはないもないが、なんとなく、そんな気がした。

翠尾は少し困ったような表情をして、しばし悩んだあと、こう言った。

「君には、知っててほしかったのかな」

明後日は翠尾と病院に行く、という金曜日のことだった。

みんな、それぞれやることがあるのだろう。放課後の教室はすでに誰もいなくて、残っているのは暇な俺だけだった。

帰るのも億劫で、かといってこのままでも手持無沙汰で眠くなるだけ。てことで、とりあえず課題にでも取り掛かろうかと、鞆へ手を伸ばしたその時だった。静寂の中へ、ゆっくりと溶けるような、引き戸を開ける音が響く。

気になって音のした方へ顔を向けると、そこに居たのは藤ノ森だった。なんでまだ残ってるんだろう、と思ったのは俺だけではないらしく、俺の存在に気付いた彼女はすぐさま質問してくる。

「何やってんの？」

刺々しいその物言いは、まだ先日の件を忘れていないと語っていた。視線の迫力もなかなかのもので、よっぽど気にしてたんだなと思わずにはいられない。

それと同時に、何にそんなに怒ってるんだろうなとも思う。この間のことは、確かに、藤ノ森のカツとなった気持ちも分からないではないし、俺も怒らせようとしていたふしがある。でも、あれは彼女の頭に血が上っていたのが主な原因で、後々に引きずるような怒りではないと思っていた。

まさか彼女の怒りがここまで長引くとは夢にも思わなかったし、現に俺は今の今まで忘れていた。

「いや、別に」

「そう」

藤ノ森は速足で歩き、きびきびと鞆と手に取って出て行こうとした。

無言の背中が、これ以上俺と一緒に居たくないと言っている。

「藤ノ森は、何やってたんだ？」

すると、立ち止まって振り返ってから、言う。

「あんたに関係ないでしょ」

「まあ、そうだけど。でも、気になったからさ」

「……………何にもしてないわよ。図書室に居ただけ」

「そっか。本、好きなんだな」

「そうだけど。……………ねえ、なんなの？ 何か用？」

「うん。できれば、話をしたいなって」

すると、彼女は盛大に顔をしかめた。そして、俺の真意を探るようにじっと見つめてくる。結局、不本意そうに彼女は口を開いた。

「……………どういう風の吹き回し？」

「藤ノ森なら、分かってくれるかなって思ったんだ」

「だから、なんなのよ。翠尾のこと？」

「そう。翠尾ってさ、人間だったんだなって思ってた」

「はあ？」

この一か月、ずっと俺のなかを渦巻いていたこの感情を、なんて言葉にしたらいいのかと、悩む。考えてはいたけれど、答えは出ず仕舞いだった。

「翠尾ってさ、変だよな？」

「……………何、それ」

「なんて言ったら良いんだろうな。俺たちとは違うって言うか。浮世離れしてる、って言えば良いのか。とにかく、違ったんだ。俺が、今まで出会った人間とは」

思い返してみても、息苦しかった記憶は、やはり一度たりともなかったのだ。

自慢じゃないが、俺は世渡りが上手い。自分でもそう自負していて、事実、他人との衝突という経験を、驚くほどしたことが無い。どうすれば、相手と上手い付き合いが出来るのか、それを本能的に

悟り、実行することが出来る人間だった。

その話が、唯子が前に言っていた、俺の自分が無いという部分に繋がるのだろうが、やはり今考えてみても、その話に危機感を感じない。

だって、もうずっとこの調子で生きてきたのだ。良いことばかりで無いのなんて、俺が一番よく分かっている。けれど、俺には他人を真正面から受け入れる包容力も、跳ね除けるだけの覚悟もない。これしかないのだ。俺の中身は、この能力を使いながら生きていく準備を、既に終えてしまっている。

だから、本当に自慢にならないけれど、きっと俺は、こうやって誰ともぶつからずに生きていく。その事実はとも俺に馴染んだし、重苦しい気分になったとしても、息苦しくなったことなんて、一度もなかったのだ。

彼に出会うまでは。

彼、当然ながら翠尾なのだが、その人はとても唐突に俺の人生へ現れた。

君ってさ、その名前気に入ってる？

それは、入学してから数か月した頃で、さすがに翠尾の本性を知らない人間が居なくなっただ頃。俺だって知っていた。翠尾がどんな変人なのか。

けれど、持ち前の世渡りスキルで、ごく自然に言葉を返した。どいう意図があつてそんなことを聞くのか、全く全然分からなかったけれども、嫌いではないと答えれば、ふうんと笑う。

裏が無いと思った。その瞬間、俺は今までの人生を悔いる。

理由なんて、今考えてもさっぱり分からない。けれど、無性に、子供の頃に戻りたいと思ったのだ。昔に戻って、人生をやり直したいと。

動揺は顔に出さなかったと思う。態度にも出さず、これ以上無い

はどうまく、隠しきつたはずだ。それでも俺の動揺は止まらない。実は、翠尾は俺の動揺に気づいてるんじゃないかと、疑心暗鬼になっ
ていく。

けれど当の本人は、そんな俺のことなんて知らん顔、と言った様子で自分の席へ戻っていった。

俺の胸はざわついたまま。見逃された、だの、見下されてる、だの、馬鹿げた妄想が頭をよぎる。でも、それも次第に落ち着いていった。

それでも大丈夫だ、と思ったのだ。翠尾に俺の化けの皮が剥がされたとしても、困ることなんて思い浮かばなかったのだ。

だって翠尾だ。俺が、実は被害妄想に囚われ易い、他人を疑うことしかできない人間だと翠尾が知ったところで、それがどうしたというのだろう。それで、一体どうなるというのだろう。

そこまで考えて、俺は少しほっとした。もちろん、不安な気持ち
が、完全に消えたわけでは、無いのだけれど。

そうやって翠尾は、とても唐突に、いとも簡単に、俺の人生の一部となった。

「今でも、よく、分からない。でも、俺は翠尾に会って、自分が大嫌いになったんだ。人生を悔いた。やり直したいと、思ったんだ」

藤ノ森は、戸惑っているように見えた。

まあ、それも当然かと思っ
て、苦笑いを堪える。だって、この間自分を泣かせた男が、突然目の前で弱音を吐いているのだから。律儀に話を聞いている分、彼女は
お人よしだと言える。

「俺はもう、何も分からない。翠尾が、嫌いなのかも、そうじゃないのかも、俺はもう分からないんだ」

それでもやつぱり、あいつに良い感情は持てない。

変化を望まない俺に、無理やり後悔をさせた張本人だ。勿論、そんな俺が勝手に後悔しただけで、翠尾に何の非も無い。けれど、そんな理屈なんかよりも、自分の生理的な嫌悪の方が勝ってしまっている。

「なあ、藤ノ森、どうしたらいいかな。どうしたらいいんだろう」「どうって……………」

「藤ノ森は、翠尾に憧れたんだよね？　どういうところが？　どうして？」

彼女は、次第に俺に憐みの視線を向ける。

今の藤ノ森に、俺はどう映っているだろうか。ただの、矮小な人間に見えているのだろうか。そう思うと、腹の底が冷える思いがした。

恐ろしい。

俺と言う人間は酷く小さい存在なのだと、誰かにばれてしまうことが、何よりも恐ろしかった。だからいつでも余裕ぶる。小さく見られないようにと、冷静に自分を偽る。

それがきつと、翠尾から見える俺なのだ。

「傷つかないところ」

彼女は、とてもはつきりとした声で言った。

「何て言うか……………。誰かに傷つけられても、それに知らん顔できるところ、かな。だから、傷ついてないように、私には見える」「なるほど」

確かにそれは、的を射ているかもしれない。知らん顔。なるほど、なるほど。だから、俺たちには翠尾はつかめない存在に思えるのだ。何を言ったって、彼は知らん顔が出来るのだから。

傷つけられた痛みを知らぬふりが出来るなんて、俺には程遠い行為のように思えた。

そういうところは、俺も懂れるかもなあ。

そう呟くと、彼女は顔をしかめ、困ったような顔をしたまま、ぼそりと言葉を落とす。

「私は、あんたにも、懂れたけど」

「俺にも？」

こくりと頷く。

「翠尾は知らないふりをするけど、あんたはその逆に見えたから」
「逆って言うとは……」

「痛みに、耐えてるように見えたの。受け流すんじゃなく、受け入れようとしてるみたいに、思えた。私は傷つけられることに敏感だから、どっちも出来そうになくて、だから、二人ともに、懂れた」
彼女はとても大事なことを言うように、言葉を紡いでいく。そうか。藤ノ森には、そう見えていたのか。

少し落ち着いて、客観的に俺と翠尾を見してみる。

痛みに耐えながら、受け入れようとしながら、必死に自分を取り繕おうとしている俺。

本当は痛くても、知らぬふりをしながら、傷をも見ないふりをする翠尾。

真逆だ、と思った。だから似ている、とも。

「藤ノ森」

「な、何？」

「ありがとな。話聞いてくれて」

「……………別に」

用は済んだんでしょ、とぶっきらぼうに言っただけで靴を持ち上げる彼女の耳は赤かった。俺にあんなことを言ってしまったと、恥ずかしがっているのだろうか。

藤ノ森が教室を出る直前、「こないだはごめん」と言ってみた。
すると、彼女はびっくりを体を震わせ停止し、小さな小さな声で、「

.....別に」と言った。

ばん、と大きな音がして扉が閉まった。しんと静まり返る教室。そこには俺一人だけ。

あの瞬間の、翠尾の笑顔を思い出す。

初めて、彼の笑顔を見た瞬間。裏が無いと、思った瞬間。

きつと俺は翠尾になった。翠尾になれる道も、用意されていた。けれど、今の道を選んでしまったのは、俺。

あの笑顔を、俺は無意識の内に捨ててきたのだ。

俺は、翠尾になってみたかった。すべては、ただ、それだけだった。

そこは、窓が二つあるからか、光に満ちている部屋だった。

部屋の隅から隅まで太陽の光で照らされていて、ここが病院だということ、ふと忘れてしまいきになる。

けれど、ベッドの中で上半身を起こしている志麻さんが、それを忘れたままにしてくれない。焦点が合わないまま、目の前にある写真を眺めていた。

よく見ると、この部屋にある意味不明なお見舞いの品は、ほとんどが翠尾からのものみたいだ。

かたつむりの写真に、かめのぬいぐるみ。ほかに、もぐらやらなにやら、すべて翠尾が、なりたいたい、と言った生き物だ。それらの一つ一つを眺め、翠尾の想いを想像する。

何を思っ、彼はこれらを並べたのだろう。

「あ、ねえねえ、見て見て、志麻。雀がいるよ！」

翠尾は、いつもよりもはしゃいでいるように見えた。学校に居る時とは別人だと、苦笑い。

志麻さんは、その言葉を聞いているのかいないのか、変わらずぼうつとしているだけだったが、ふと視線を窓の外に向ける。その後も、ぼうつとするだけだった。どうやら、聴覚が無いわけではないらしい。

翠尾は、志麻さんを愛おしそうに見て、誰に言ってもなくぼそりと呟いた。

彼らのよく似た肌色の手が、重なる。

「そとに、いこっか」

＊

眩しいと感じる、その庭の中心。

今日は、気持ち良いほどに晴れた日だった。

ひとつ、ふたつ、と数えることができるくらいの雲の数。朝早くに此処に着いたはずなのに、太陽はずいぶんと高く昇っていて、ずいぶんと長い間病室に籠もっていたのだと感じた。

俺のメートル前には、車椅子を押す翠尾と、無表情のまま空を見上げる志麻さんが居た。最初は俺も隣に居たのだが、次第に離れて後方を歩くようになり、この距離を保ったところで俺の位置は落ち着いた。

すでに、そこそこの広さのこの庭を、三週もしている。それでも志麻さんは変わらないし、翠尾も話すことが無くなったりはしていないようだ。彼は、彼女に声を掛ける。

カブトムシの幼虫になりたい。

ではなく、本当に、なんでもないようなことしか言っていないかった。天気がいいと気持ち良いねえ、とか、今日来る途中のバスで会ったおばさんが、とか。もうすぐ一年の付き合いになる俺でさえ驚くほど、普通の話しかしていなかった。

そこに俺の知る翠尾が居ないのは当然だ。志麻さんの隣に居るあいつは、貼り付けた歪を取り去った、ただの純粋な個体なのだ。だってそこでは、異常を強調する意味が無い。

今の翠尾の表情は、ただ幸せだと語る。
無表情で反応の無い志麻さんを見ながら。

二人の良く似た髪が、歩くたびにさらりと揺れる。

太陽は彼らを好いていた。当たり前前の光景のように、光は二人を包み込む。

惜し気も無く、その全身で陽を浴びる。その白すぎる肌で、太陽の祝福を受け止めている。

初めは、彼らの生い立ちを、不幸だと思った。不運だと呪った。
でも。

確かに彼らはこの上ないくらい傷ついて、そして今でも痛み続ける傷を、持て余しているのだろう。いくら俺でもそれは想像に固くない。

しかし、それを不幸だと誰が言った？

「ねえ、志麻、もうすぐ期末試験があるんだ。志麻なら余裕だっただろうけど、僕は結構切羽詰ってさ」

あの笑顔の翠尾が不幸？ そんなわけないじゃないか。志麻さんだっけそうだ。彼女は決して、俯いたりなんかしていない。

幸せなのだ。彼らは。

規則正しく彼らと一メートルの距離を保っていた俺の足は、次第に重くなっていき、やがて動かなくなった。少しずつ少しずつ、遠くなっていく翠尾の背中を見ていた。

二メートル、三メートル。そこで彼も足を止め、俺の姿を探すように振り向いた。

「何したの？」

なんでもない、と声にならない声で呟いて、首を振る。少しの間、彼は不思議そうに俺が追いつくのを待っていたが、動く気配が無いことを悟ると、志麻さんが乗る車椅子ごと体をこちらへ向けた。しかし彼女の視線は斜めに向かつていて、俺の右側あたりを見つめている。そんな志麻さんに、翠尾は笑顔で話しかけた。

「ねえねえ、志麻、志麻。あの人ね、こうきつて言うんだよ」

満面の笑みで、素晴らしいことでも言うかのように、彼は言った。すると、志麻さんはゆっくりと頭を動かし、俺の姿を捉える。どうやら、視覚も無いわけじゃ無いらしい。虚ろなのにしっかりとした眼光が、初めて俺に向けられた。

「幸せに輝くって書くんだ。幸輝って名前なんだよ。それでね、僕の、一番の友達」

にこにこ笑う翠尾の顔を見てから、また俺の顔を見る。彼女は、微笑んでいた。幸せが溢れだしているように。

「幸輝」

透き通った、水飴のような声が俺の名前を呼んだ。どこにでもあるような、ありきたりな自分の名前が、まるで宝物のように響く。

あの二人の幸福が見える。

どうしようもないほどの、美しすぎる幸福が。

地面に陽が反射する。彼らはまるでシャワーでも浴びるかのよう
に、その真っ白な肌を幸福の下に晒していた。

泣きたい。この感情を言葉に直して、すぐに訂正した。
泣けたらいい。幸せの涙を、今すぐ流せたらいい。

*

眩しいと感じる、その庭の中心。
今日は、気持ち良いほどに晴れた日だった。

冬の終わりも、きっと近い。

f i n .

あなたがこの手紙を見ているのなら、きっと私はもう生きていないのだと思います。

これは、最後の手紙として、そして私の遺書として、残して置きたいと思う。

まず、ごめんなさい。あなたは何も悪くないの。悪いのは、私。お父さんにも、あなたにも、悪いことをしました。あなたはそんなことないって言いそうだね。いつもみたいに、けろっとしながら、でもね、違うの。私の所為なの。私が弱かったから、こうなってしまった。

羨ましかったの。君のことが。弟が羨ましい、なんてちょっと変だけど。でもね、憧れてたんだよ。君の強かな部分とか、しなやかさとかに。本当だよ？

お父さんの規則をきちんと守っているのに、縛られてるって感じはなかった。それが、とてもとても羨ましかったの。私はどうしても、窮屈に感じられていたから。なのに我慢していて、頑張っ、努力して。生きるのが苦痛でしようがなかった。

君もそうだったかな？ 今考えてみると、私、本当に自分のことばかりで、あなたを気遣う余裕がなかったように思うの。ごめんなさい。

だから突然に見えたのかな。私にとっては急な話だったのだけど、君はぱたりと規則をやぶり始めた。そうして、父を諦めさせて。

あなたが離脱したせいで、父の期待を一身に背負うことになってしまった私に、君は最後まで悪いと思ってたよね。

そんな弟の姿を見て、私は、馬鹿だなあって思ってた。ごめんね？ でもね、君が悪いことなんて何一つなかったんだよ。ただ負担

が増えて苦しいだけなら、私も、君と同じようにすればよかったんだから。

だから、私が苦しんだのは、私の所為。怖かったの。お父さんに見放されることが。今まで信じてきたものを、否定するのが。

ね、馬鹿でしょう？

だから、こんな馬鹿な女に負い目を感じるのなんて、止めなさい。君は何も、悪くないんだから。

それから、もう一つ、心配なことがあるの。

あのね、早々に離脱して、自由になって好き勝手にたくせに、友達が少ないってどういうこと？

いや、百歩譲って、少ないのは良いとする。でも、一人も親しい人がいないってどういうこと。

許されないよ。友達くらい、ちゃんと作りなさい！

いい？

高校に入ったら、普通に、ちゃんと、友達を好きになること！それから、一番の友達を作りなさい。約束ね。

真面目に学校に行って、友達作って、それなりに恋して。あなたがそうしてくれれば、あとはもう心配なことはないかな。

なんだか私は、君のことを心配してばかりだね。だって、あなたがそんな変わり者になってしまったことの責任の一端は、私にもあるような気がして。

でもね、君のそんな部分に、救われてたところもあったんだ。あなたと初めて関係を持った夜。私は怯えてた。幸せだったけれ

ど、不安で不安で、つぶれてしまいそうだった。そんな感情をいろいろ込めて、私は、赤ちゃんがきたらどうしようって呟いたの。そしたら、当たり前な顔して言うものだから。

「だったら、名前考えなくちゃね。どうする？」

予想もしていない答えで、体中に巣食っていた暗い感情が、すべて飛んで行ったの。

つい笑ってしまって、ねえ、私はその時、心から幸福だと思ったのよ。

こんなことを言ったら怒るかな。

私は今でも、君への感情が恋愛だったのか、どうなのか、分からない。ただの同情だったのかもしれないし、仲間意識だったかもしれない。それを愛と呼ばないのは知っているけれど、恋だとも思わない。

あなたも、そうじゃない？ 愛していたかと聞かれたら頷いただろうけど、自分から言うことはなかったでしょう。私も、同じ。

でもね、そんなのはどうでも良いと思った。私はいつでも君を慈しんでいられたし、君からも同じだけのものをもらっていた。幸せ

で幸せで、毎日が楽しくて仕方なかった。

君と一緒に居た時間は、確かに、幸せに輝いていた。

そうだ。あの時答えられなかった問いの答え、今用意しても良いかな。

私たちの、子供の名前。あの時は、そんなこと想像も出来なくて、ただ泣くほど笑っただけだったけれど。

幸輝が良い。私たちの子供の名前は、幸輝にしたい。

そろそろ書くこともお終いです。ここまで読んでくれて、ありがとう。

それから、ごめんなさい。こうなってしまった以上、やっぱり、君の言うように簡単にはいかないと思う。

私は、君の未来を壊してしまった。

そう思うと、もう、苦しくて苦しくて、死にたくなるの。これを書いている途中でも、何度も何度も書き直した。もう、私はダメみたい。頭が可笑しくなってるのがね、自分でも分かるの。

このままだったら、私はいずれ、狂ってしまふ。
だから死にます。ごめんなさい。

読み直すことはできそうにないから、変なこと書いてたらごめんなさい。

今までありがとう。私は、幸せでした。

我が愛する弟へ。

翠尾 志麻より

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7563q/>

幸福シャワー

2011年2月24日18時10分発行